

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第96回

観光案内に載らないパリ案内(下)

日曜日と月曜日、たった2日で廻れる、知られざる街中の秘境

稲賀 繁美

(いなが しげみ/国際日本文化研究センター, 総合研究大学院大学)

建築・遺産都市の威容

同じ巨大なシャイヨー宮のセヌ川から見上げて右翼には、シャイヨー劇場のさらに右側に建築博物館が納まっている。正確には「建築と遺産の都市」*cit  de l'architecture et du patrimoine*と呼ばれる施設であり、10年におよぶ改修工事のすえに、2003年に開館された。丁寧に見学すれば、半日ではとても廻りきれないだけの盛り沢山な展示が、広大といってよい空間に展開している。地上階はフランス全土の主要なロマネスク、ゴシックからルネサンス様式に至る建築遺蹟の教会正面扉の彫刻や装飾で圧倒的。現物から型を取った塑像による模造が、原寸大で復元されている。一時は旧時代の遺物として廃棄される寸前だったというが、これを洗浄、救出してあらたな教育施設として活用する案が浮上した。結果は大成功といってよい。現地をすべて探訪することなど、極東の研究者にとっては一生をかけても不可能に近い。その夥しい数の遺蹟の忠実な複製を、直に相互に比較検討する機会が得られる。むろん複製で不足の部分は現地で確認するにしくはない。また現地の地理を弁えるには、巡礼の足を伸ばす必要があることも言を待たない。だが実際の規模の違いなどは、記憶のうえでは、かえって実感できない。それが一望の下に集約できるのである。

地上階最後の間は、修復の父として知られるヴィオレ・ル・デュックViolet le Ducにちなんだ名前を冠しているが、ここはア

トリエとなっており、2012年10月11日から13年3月17日までの日程で、切り紙による建築模型の特別展示がなされていた。一枚の紙から切り出して立体を造形するステファニー・ベックSt phanie Beckの妙味には、日本の折り紙や中国の切り絵が発想源となっている*図19。そのかたわらで、マティルド・ニヴェMithilde Nivetは、紙細工の集合体で町並みを編み上げる。想像力を愉快地に刺激させる企てであった*図20。

上階には近現代建築の広大なアトリエがあり、若い建築科の学生たちが研究に利用している。さらに入場口上部には2層にわたる壁画とステンド・グラス展示の空間が広がっている。あまりに奥が深いため、ここまで足を伸ばすのは、よほど通の観衆に限られよう。さらに地下階では特別展が開かれており、こちらの充実ぶりも半端ではない。2月に筆者が訪れた折には、回廊の部分では、アドリア海浜で活躍する建築家、ニコラ・バシックNikola Basicの写真パネルによる展覧会とマルセル・ブロイアーの回顧展ほかが開催されていた。

バシックの展覧会は、コルナートKornat島の不毛の丘陵に石を築いてつくった十字架が横たわる広大な墓地「十字架の原」と、ヴォディーチェVodiceの丘のカルメル会のノートルダム寺院、さらにザダールの船着場に設けた「海のオルガン」を展示する。「海のオルガン」には、打ち寄せる波を利用して音響と光線を演出する階段が仕込まれている。これでさすがにおしまいかと思

図19 ステファニー・ベック 一枚の紙を切り抜いて折り紙で造った仏教のバゴダ

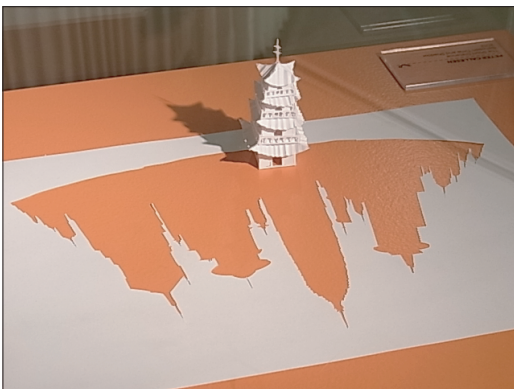
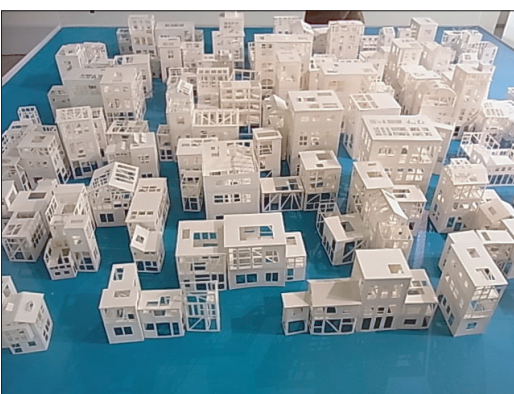


図20 マティルド・ニヴェ 紙細工の町並み
(図19-20はアトリエ特別展での展示作品)



うと、その奥の巨大といつてよい地下の広間では、さらにもうひとつの展覧会が開かれている。こちらは、バウハウスの家具デザイナーから北米に移住して建築家として大成した、マルセル・ブロイアーMarcel Breuer (1902-1981) の回顧展。ブロイアーといえば、1927年のB3と呼ばれた鉄パイプに布張りの椅子は、現代デザインの草分けとして、あまりに有名だ。ニューヨークのホイットニー美術館旧館 (1966) , ニューヨーク大学の丘の上のベグリッシュ・ホール, あるいはミシガンの聖フラシスコ教会などは、写真を見れば、記憶の甦る読者も多いことだろう。オートサヴォアのホテル、フレイヌFlaineの岩山から突き出た直方体のテラスを覚えている建築の学生もあるだろう。

パナソニック汐留ミュージアム展示場の広さが、この建築宮地下最奥部のブロイアー展の床面積と同程度。ただし汐留の天井

の高さは、この地下展示室の半分以下といえ、宮殿全体の規模のほども、いささかご想像いただけるだろうか。建築関係の図書を完備した売店にも重宝するが、とりわけ陳列ケースの見事さには、どうして日本ではこれが無理なのか、と毎度のように慨嘆する。紙製の建築組み立てキットが、イタリア語と日本語とをチャンポンにして、型紙ならぬcasagami, つまり紙製の家と呼ばれていたのも、愉快な新語発見だった。図書購買部の前のカフェからはエッフェル塔が正面で、これも穴場。

建築宮では、これだけの規模と内容の展覧会が、これといった広告もないままに企画されている。おりからポンピドー、センターではダリの回顧展と、アイリーン・グレイEileen Gray (フランス語発音ならエレン・グレ) の回顧展がおこなわれていた。グレイはアール・デコのデザイナーだが、日本



図21 モアッサックのサン・ピエール寺院正面扉口
(1120-30) 石膏型建築模型複製 (1880-89)



図22 casagami「型紙ならぬ家-紙」のキット (建築と遺産の街: 売店での商品陳列から)



図23 ポール・アンドリュースが設計したパリ・シャルル・ド・ゴール空港2-Eの出發口ビー



図24 パリ・シャルル・ド・ゴール空港
(2012年旧正月「蛇年」記念の広告から)

の蒔絵に学んだことでも興味を引く人物である。だがダリへの一般の人気のためか、たったひとつの入場口からは、広場を横切る長蛇の列が伸びている。月曜日開館の博物館、美術館は限られているが、時間に制限のある旅行者であれば、こんな場合には、

すぐさま目先を変えて、目的地をシャイヨー宮に変更するのも、ひとつの作戦だろう。オルセーやポンピドーの新たな展示を楽しむのもよいが、それらはいまではどうもチト古臭い。パリはゆっくりとだが、自己刷新を続け、思わぬ変身を遂げている。

* 2月下旬にパリの国立美術史研究所で「建築における交流」と題するシンポジウムで司会を務めた、といった調子でこの会合の報告をしてもよかったのだが、今回は趣向を変えてみた。そろそろパリという町と付き合いはじめて30年を越えた。現在80歳代で20代からパリとお付き合いのある長老格には、留学初期に藤田嗣治の談話に加わったといった、半世紀以上前のご記憶をお持ちの現役が、まだ何人もおられる。当方などホンの青二才に過ぎぬとは重々自覚のうえで、昨今のパリ穴場情報の一端を僅かながらご披露した次第である。

2013年2月23(土)-24(日)日の週末2日間に取材。2013年3月11日執筆。

*** 専門書籍案内:**

・ フランスの海事に関する専門書店

Librairie Larguez les Amarres, 27 rue de la Gaité tel. 01 43 22 56 39 /E-mail: larguezamarres@gmail.com

・ 建築宮付属の建築関係書籍専門店

Librairie de la cité Le moniteur, 1 Place du Trocadéro, 75116 Paris, tel. 01 78 09 03 00, www.librairiedumoniteur.com

・ アラブ圏、イスラーム関係書籍

Institut du monde arabe, 1 rue des Fossés Saint-Bernard, Place Mohammed V, 75236 Paris, tel. 01 40 51 39 30

・ アフリカ、オセアニアほかアジア関係人類学、民族学、民族誌関係

Librairie du Musée Quai Branly, 220 rue de l'Université 75007 Paris, tel. 01 47 53 60 23 e-mail: librairie.musee-branly(at)mn.fr